

88 誌上発表 和語としての気の用語「気まぐれ」考

小曾戸明子

おそど末病研究室

精神医学の歴史も他の分野と同様、明治の開国以来西欧の学問の摂取に多くの精力を要したが、日本人の患者を診るには日本語で記載し、日本語で物を考えるようにしようと決心したという土居健郎（一九二〇—二〇〇九）の開眼は、一九五〇年のアメリカ留学体験の中での文化的な衝撃（culture shock）によるらしい。ベストセラーとなった『甘えの構造』（一九七一）の冒頭に「甘え」の着想の章が置かれ土居の研究史の概略が記されている。その中で再度土居が渡米した一九五五年に西海岸で発表した「日本語と心理」に関心を示した著名な精神科医、フリーダ・フロム・ライヒマンに言及されている。「彼女を訪ねて他の研究者たちにも私の考えを紹介してほしい」という招待を土居は嬉しく受け会いに行く。小グループの中で実り多い対話や議論がなされ、その翌年以降の土居の姿勢を確かなものとした。学会発表では森田の「とらわれ」論を甘えの観点から深めて分析。さらに自分という言葉で欧米語の訳語である自我・自己が抽象名詞であるのに比して具体的な意識をさすとして、「自分がない」「自分がなかった」などの表現が可能となることを考察。こうした自分の意識は内心の甘えを前題としており、しかも甘えに対立するものとしてあらわれてくることを主張。これらは精神神経誌に二つの論文として結実する。（一九六三年、一九六五年）甘えという鍵概念を梃として種々な現象を論じつつ臨床家としても後進を育てていく。

『甘えの構造』の中で「気概念」や「気がすまない」の一節は四千字前後で短い、平明な中に密度の高いまとまりがあり、かつてのパロ・アルトでの親しい討論などを彷彿させる生き生きとした文章となっている。

今回「気まぐれ」という和語としての気の用語を取りあげたのは、いくつかの源泉がある。女性史の分野では堺市生まれの与謝野晶子（一八七八—一九四二）の自伝小説『明るみへ』の後尾の書簡。医学の分野では福井出身の土肥慶蔵（一八六六—一九三一）の『鶚軒遊戯』の小序。芸術の分野では松山市生まれの洲之内徹（一九一三—一九八七）の「気まぐれ美術館」（月刊誌の連載）そして何よりも精神医学の師匠、京東生まれの安永浩（一九二九—二〇一一）の「安永浩セレクション」（内海健編・二〇一四）所収の「中心気質という概念について」。（初出、木村敏編『てんかんの人間学』一九八〇）

近年この「気まぐれ」という和語にはどこか否定的で軽んじられる傾向が感じられる。安永は子供の心性（中心気質）を大人にも必須な心的素養として緻密な論を展開しているが、「意識の持続がなく」「気まぐれであてにならない」という印象と共に、他方で「その感覚性の深さ（当人にとってその必要（need）がある）」と言及。

うつ病を発症しやすい性格傾向（執着気質）の対極にある「とらわれない」子供の心性の和語・日常語として「気まぐれ」に注目したい。子育ての母親や患者を世話する者には必須な心的素養である。要求してはあきっぱく一瞬に次なる関心や訴えに移っていく幼い者と互角に生きていく為に、（葛藤や怒りでなく）その瞬間に波長を合わせて楽しみや喜びを見出せる能力としての「気まぐれ」。漢語「移精変気」もこの和語で理解が深まろう。